

殷代漢語の時間介詞“于”の 文法化プロセスに関する一考察 —未来時指向を手がかりに—

戸内俊介

(東京大学・院)

要旨 殷代漢語の時間介詞“于”は、時点を表すとの理解を前提として、その成立過程を動作行為の地点を導く介詞“于”から拡張したと説くのが従来の説である。ところが Takashima 1990 は、甲骨文の“于”が導く時間には、明確な「futurity」(本稿では「未来時指向」と称す)があることを指摘しており、これが是認されるなら、従来の説明は再検討が迫られることになる。本稿では Takashima 1990 の妥当性を再確認した上で、“于”はまず移動動詞から着点マーカーへ文法化し、次に時間介詞に拡張することで、未来時を指向するに至ったとの新たな解釈を提示する。

キーワード 甲骨文 時間介詞 于 文法化 未来時指向

0. はじめに

殷代漢語¹⁾に見える時間介詞“于”は、時点を表すものと解釈されることが多く(黄伟嘉 1987:69、張玉金 1994:289-295 など)、この理解を前提として動作行為の行われる地点を導く介詞“于”から拡張したものであるとの説明が従来なされてきた(郭錫良 1997:133)。ところが Takashima 1990:36-37 は、甲骨文の時間介詞“于”は単に時点を表すのではなく、明確な「futurity」(本稿では「未来時指向」と称す)を帯びているということを描き、これが是認されるなら、時間介詞“于”が動作の行われる場所を導く介詞“于”から拡張したという説明も再検討が迫られる。

本稿はまず Takashima 1990 の妥当性を再確認した上で、“于”の時間介詞に至るまでの文法化(grammaticalization)、拡張(extension)に関する新たな解釈を構築する試みである²⁾。その結果、“于”はまず移動動詞から着点(goal)マーカーへ文法化し、次に時間介詞に拡張することで、未

来時を指向するに至ったとの解釈を提示する。

1. 時間介詞“于”の未来時指向

甲骨文の時間介詞“于”は、黄伟嘉 1987:69 が「介绍动作行为发生或进行的时间」と言い、張玉金 1994:289-295 が「有“在”的意思」や「有“到”的意思」と解釈し、郭錫良 1997:133 が「它的作用是引进动作进行的时间」と述べているように、単に動作が行われる時点を導くものとの解釈が従来なされてきた。ところが Takashima 1990 は以下の例から、もう一步踏み込んだ考えを提示している。

(1) 𠄎𠄎今日𠄎。于翌日𠄎。(人文 1863)³⁾

〔𠄎祭を行うために、今日𠄎祭を行う。翌日𠄎祭を行う〕⁴⁾

(2) 貞：于來乙巳𠄎。貞：𠄎乙酉𠄎。(丙編 344)

〔貞問した：乙巳の日（十干十二支 60 日のうちの第 44 日目）に𠄎祭を行う。貞問した：乙酉の日（第 22 日目）に𠄎祭を行う〕

Takashima 1990:36-37 は (1)、(2) を含めたいくつかの例を挙げつつ、いずれの例においても“𠄎”⁵⁾と“于”が対貞⁶⁾をなす時、“𠄎”は近い未来時を、“于”は遠い未来時を導いていることを指摘した上で⁷⁾、「Without going into details, I would suggest that in the bone inscription the word yu 于 had a clear “futurity” meaning」と主張し、“于”に「futurity」を認めている。

ところがこの説は高嶋氏自身が述べている様に細部の論証が為されておらず、またそれ以降の主立った関連する論考、張玉金 1994、郭錫良 1997、張玉金 2003 等でも全く触れられていない。そこで本稿は上例 (1)、(2) 以外にも“于”の未来時指向を示す現象があることを指摘し、高嶋説を補強したい。

まず、「于」+時間介詞」が命辞・占辞に見られる一方で、前辞・驗辞に見られないことが挙げられる⁸⁾。今回、『合集』の“于”を含む例文から時間介詞に関わるものを抽出し、そのうち残欠があり文意が確定し難い例文を除いたところ、およそ 400 例程度を得るに到った。この約 400 例を精査した結果、時間介詞“于”は必ず命辞・占辞で用いられており、前辞・驗辞では決して用いられないことが看取できた。以下の例 (3)、(4)、(5) の明朝体部分は命辞、(6)、(7) の斜体部分は占辞であるが、いずれも時間を

導入するのに“于”を用いている。一方、例(3)、(4)、(6)、(7)、(8)、(9)のゴシック体部分は前辞で、(6)、(8)、(9)、(10)の枠内は驗辞であるが、時間詞を裸のまま用いており、“于”を用いることはない。

命辞、占辞とは占トの文であり、現在から見て未来の事態がどうなるかを判別するものであるから、そこで導入される時間は発話時現在を参照点とした未来時である。前辞は占トを行った時間を記録した文で、驗辞は占トした事項が結果としてどうなったかを記した文であるから、そこに導入されている時間は過去時である。“于”が前者でのみ用いられ後者で用いられないことがないということは、“于”が導く時間が未来時であって、過去時ではないということの意味している。

(3) 壬辰，貞：王于癸巳步。(合集 32947)

〔壬辰の日（第 29 日目）に貞問した：王は癸巳の日（第 30 日目）に歩いて行く〕

(4) 壬午余ト：于一月又（有）事。(合集 21664)

〔壬午の日に真人余がトった：一月に大事がある〕

(5) 于旦王廼田，亡（無）戎。(合集 28566)

〔日の出の時間に王が狩猟をすれば、災いはない〕

(6) 癸丑ト，争貞：自今至于丁巳我戎宙。王固曰：丁巳我毋其戎。于來甲子戎。旬出（有）一日癸亥車弗戎。之夕，甲子允戎。(合集 6834 正)⁹⁾

〔癸丑の日（第 50 日目）にトい、争が貞問した：今から丁巳の日（第 54 日目）までに我々は宙国を伐つことができる。王が占って言った：丁巳の日に伐つべきではない。（丁巳から 7 日後の）甲子の日に伐つべきである。占トをした日（癸丑）から数えて 11 日目の癸亥（第 60 日目）の日、配下の車（人名）は伐つことが出来なかった。その夜曇り（？）、甲子の日に本当に征伐できた〕

(7) 丁ト：子令庚又（侑）又（有）母，乎（呼）求凶。索尹子人。子曰：不于戎，其于壬人。(花東 125)

〔丁の日にトった：子は庚に命じ有母に対し侑祭を行うため、庚を呼んで凶（？）を求めさせた。索尹子人（？）。子が言った：（丁の翌日の）戊の日ではなく、（丁から 5 日後の）壬の日に人（？）〕

(8) 庚午卜：壬申雨。壬申允雨。(合集 12908)

〔庚午の日（第7日目）に卜った：壬申の日（第9日目）に雨が降る。実際壬申の日に雨が降った〕

(9) 甲申卜，敵貞：帚（婦）好媿，妨（嘉）。王固曰：其佳丁媿，妨（嘉）。其佳庚媿，弘吉。三旬又一日甲寅媿，不妨（嘉）。佳女。(合集 14002)

〔甲申の日（第21日目）に卜い、敵が貞問した：婦好の出産は喜ばしいものである。王が占って言った：丁の日出産すれば喜ばしい。庚の日に出産すれば、弘吉である。占卜をした日（甲申）から数えて31日目の甲寅の日（第51日目）に出産したが、喜ばしいものではなかった。女兒だったのである〕

(10) 王固曰：吉。庚辰多夔甲。(合集 37847)

〔王が占って言った：吉である。庚辰の日に夔甲に対し多の祭祀を行った〕

このほか、以下の例(11)、(12)のように命辞・占辞の直後の占卜執行の月を記した文¹⁰⁾でも、時間介詞“于”が用いられた例は見つからなかった。この種の文脈で用いられている「某月」は占卜を行った時間を記した文であるから、導入されている時間は過去時であり、そこで“于”が用いられないということは、“于”が過去時を導かないということになる。

(11) 貞：不其雨。在五月。(合集 24710)

〔貞問した：雨が降らない。五月に卜った〕

(12) 戊寅貞：來歲大邑受禾。在六月卜。(合集 33241)

〔戊寅の日に貞問した：來歲に大邑は稔りを受ける。六月に卜った〕

殷代の青銅器銘文には時間介詞“于”を見ることができない¹¹⁾。青銅器銘文とは基本的に過去の事跡を記したものであるから、それ故“于”が用いられなかったと解釈することができ、Takashima 1990の主張とも矛盾しない。

“于”は未来時を発話に導入するのに義務的に用いられるわけではなく、命辞の中に裸の時間詞が用いられることもある。しかし例(13)から(16)のように裸の時間詞と「于」+時間詞」が対貞をなすとき、必ず後

者が前者よりも遠い未来時を指すことは興味深い。

(13) 貞：辛亥王入。于癸丑入。于甲寅入。于乙卯入。(合集 5175)

〔貞問した：王は辛亥の日(第48日目)に入る。癸丑の日(第50日目)に入る。甲寅の日(第51日目)に入る。乙卯の日(第52日目)に入る〕

(14) 壬戌卜：今日王省。于癸亥省象。(合集 32954)

〔壬戌の日(第59日目)に卜った：今日王は(象地を)巡察する。癸亥の日(第60日目)に象地を巡察する〕

(15) 辛丑卜， 癸貞：其于六月媿。貞：今五月媿。(合集 116 正)

〔辛丑の日に卜い、癸が貞問した：六月に出産する。貞問した：今月五月に出産する〕

(16) 貞：今七月王入于商。貞：王于八月入于商。(合集 7787)

〔貞問した：今月七月に王は商に入る。貞問した：八月に王は商に入る〕

先述した“東”と“于”の関係とも考え併せると、“于”は単に未来時を導く介詞というのではなく、発話時現在から見た際のより遠い未来時を導く介詞だと言えるのである。そして、この種の“于”は後の時代の出土資料(金文、戦国文字資料など)及び先秦文献資料には全く見られない特殊なものである。

“于”の未来時指向は、同時代の他の時間介詞と較べても極めて特異である。例えば“至”はしばしば“于”と連結して用いられるが¹²⁾、単独では以下(17)のように過去の事態を記した驗辞(粹内)においても用いられていることから、そこに未来時指向を認めることができない。

(17) 王固曰：出(有)求(咎)，其出(有)來艱。𠄎(迄)至五日丁

酉允出(有)來艱自西。(合集 6057)

〔王が占って言った：祟りがあり、災厄が来る。五日目の丁酉の日になって本当に西から災厄が来た〕

2. “于”の空間表現における文法化

本章以降では未来時指向を手がかりに、時間介詞“于”の成立過程を文法化や拡張という方向から検証しようと思うが、現在甲骨文より古い言語

的資料が存在しない以上、これ以前の様相については実際の資料によって確認することはできない。従ってここでは甲骨文という共時的言語資料¹³⁾に見られる“于”の種々の機能を分析し、文法化の一方向性 (unidirectionality)¹⁴⁾や意味拡張の方向を勘案して、“于”の時間介詞にいたるまでの成立過程を想定する。

“于”の文法化を検討するにあたり、まずは動詞の“于”から検証を始める。“于”が動詞“往”と密接な関係を持つことは古くから言及されおり、例えば訓詁においては、『毛詩』國風・桃夭篇「之子于歸」の毛伝に「于，往也」とあり¹⁵⁾、また『呂氏春秋』季夏紀・音初篇は『毛詩』國風・燕燕篇「燕燕于飛」の“于”を「燕燕往飛」の如く“往”で引いている¹⁶⁾。清朝考証学においても陳奐は『詩毛氏傳疏』國風・桃夭篇「之子于歸」の疏で「于與往同義矣」としている¹⁷⁾。Pulleyblank 1986:2はこの種の現象と“于”と“往”の音韻的な近さに着目しつつ (Pulleyblankは前者を *wää に、後者を *wǎŋ に再構)、「The two words are undoubtedly etymologically related」と指摘している。また Ito and Takashima 1996:249も両字が陰陽対転の関係にあることから (“于”：匣母魚部、“往”：匣母陽部の魚陽対転)、「Yu also has a morphological relationship with wang 往 ‘go’」と述べている。

以上の考察に加え、Serruys 1981:332-333、黄伟嘉 1987:70、郭锡良 1997:131-134、梅祖麟 2004:325-326等は甲骨文の“于”にも移動動詞と見なし得るものがあることを指摘しているが、どのような“于”を動詞と認めるのかについてはそれぞれ意見を異にしている。本稿では紙幅の都合上、各説を逐一検証することは控えるが、少なくとも下例の“于”は動詞として分析すべきだと考える。

(18) 壬寅卜：王于商。(合集 33124)

〔壬寅の日に卜った：王は商に行く〕

(19) 貞：在我。貞：于蔑。(合集 8308)

〔貞問した：我が領域にいる。貞問した：蔑地に行く〕

(20) 己巳卜，争貞：方女于敦。貞：方女勿于敦。(合集 11018 正)

〔己巳の日に卜い、争が貞問した：方女(?)は敦地に行く。貞問した：方女は敦地に行かない〕

(18)は他に主要動詞がないことから、(19)は「于 + NP」が動目構造「在 + NP」と対貞になっていることから“于”が動詞であると分かる。またそう解釈することで、(19)は殷の領地に留まるのか他の地方へ行くのかを卜ったものと見ることができ、卜辞として整合性が取れる。(20)を含む合集 11018 正は残欠少ない甲骨で多くの卜辞が記載されているが、その中に(20)と内容上関連のある卜辞は1つもないため、(20)を主要動詞が省略された文とは見なし難い¹⁸⁾。やはり“于”を主要動詞だと見るべきである。

『合集』を見るに、動詞の“于”は必ず目的語に着点(goal)を伴い、次で取りあげる移動動詞の後ろで用いられる“于”も必ず前の動詞の表す移動による着点を目的語にとっており、“于”で文が終結することはない。“于”はこのように着点と不可分な関係にあることから、本来、到着を含意した動詞であったと考えられる。

次に取りあげるのは移動動詞と共起する“于”である。

(21) 貞：王勿往于敦。貞：王往于敦。(合集 40303)

〔貞問した：王は敦地に行かない。貞問した：王は敦地に行く〕

(22) 貞：翌己巳步于衣。(合集 11274)

〔貞問した：己巳の日に衣地に歩いて行く〕

(23) 貞：于庚申出于敦。(合集 7942)¹⁹⁾

〔貞問した：庚申の日に敦地へ出ていく〕

(24) 辛未卜，争貞：王于生七月入于商。(合集 7776)

〔辛未の日に卜い、争が貞問した：王は七月に商に入る〕

(25) 方其來于沚。(合集 6728)

〔方国は沚地に来る〕

上例の“于”の前に来る動詞はいずれも移動を表す動詞であるが、“于”なしには直接に場所目的語を導きにくいことから²⁰⁾、その動詞は自動詞だと分かる。そして“于”は前の動詞の表す移動による着点を導く役割を担っている。

ところで沈培 1991:127-132、張玉金 2003:198-199、梅祖麟 2004: 326-327 等は上例(21)から(25)の如き“于”をいずれも介詞に分析しているが、実はこの種の“于”は必ずしも介詞と言い切れないところがある。沈培

1991:140-148 が主張したように、甲骨文で介詞フレーズは動詞後が常態であるものの、焦点化された場合しばしば動詞に前置されることがある²¹⁾のだが、着点を導く“于”の場合、沈培 1991:131 も述べるように必ず動詞の後ろで用いられる²²⁾。このように本来介詞にあるはずの前置現象がないということから、着点を導く“于”はまだ介詞の段階に到っておらず文法化の中途段階で留まっている、謂わば次動詞 (coverb) と見なせるのである。以上のように、この種の“于”の品詞については明確な判断が難しいため、本稿では便宜的に「着点マーカの“于”」と呼ぶこととする。

最後に取りあげたいのは地点 (locative) を導く“于”である。例えば、

(26) 貞：乍（作）大邑于唐土。（合集 40353 正）

〔貞問した：唐土に大邑を作る〕

(27) 壬戌卜：王其尋二方白（伯）。大吉。王其尋二方白（伯）于自辟。于南門尋。（合集 28086）

〔壬戌の日に卜った：王は2人の方国の首領を尋ねる。大吉。王は自辟地で2人の方国の首領を尋ねる。南門で尋ねる〕

(28) 于車舞。乎（呼）舞于敦。勿乎（呼）舞于敦。（合集 13624 正）

〔車地で雨乞いの舞いをする。人を呼んで敦地で雨乞いの舞をさせる。人を呼んで敦地で雨乞いの舞をさせない〕

例(27)、(28)で“于”は主要動詞（例(27)では“尋”、(28)では“舞”）の前後両方で用いられている。地点マーカの“于”はこのように動詞に前置できることから、介詞であると判断できる。

次に“于”の文法化プロセスについて検証する。第一に動詞から着点マーカへの文法化が考えられるが、その過程については“于”が連動構造の第二動詞の位置で文法化したという梅祖麟 2004:327-328 の意見に同意したい。すなわち、“于”は甲骨文に至る以前は「“于”動+NP」の他動詞であったと同時に、「移動を表す自動詞²³⁾+“于”動+NP」という連動構造の第二動詞の位置で、第一動詞の移動に伴う到着を表す動詞としても用いられていたが、時代が下ると「“于”+NP」で第一動詞の移動により到着する場所を表す1つのユニットとして再分析 (reanalysis) され、その結果“于”は虚化し着点マーカになったということである²⁴⁾。この

“于”は前の動詞による到着を意味していることから、未だ動詞“于”の意味を色濃く残していることが分かる。

次に想定されるのは着点マーカの“于”から地点マーカの介詞“于”への文法化である。地点マーカの“于”は着点マーカの“于”と比べると、動きや方向性が漂白(bleaching)されていることから、着点マーカの“于”がもう一段階虚化したものと見ることができる。

従って空間表現における“于”の文法化としては、

(29) 動詞“于”>着点マーカの“于”>地点マーカの介詞“于”
というプロセスが想定できる。

3. “于”の時間表現への拡張

最後にどのように時間介詞の“于”が成立したのか考えたい。大枠としては空間概念領域の“于”が時間概念領域に拡張したと考えられるが、過程としては着点マーカ“于”からの拡張と地点マーカ“于”からの拡張の2種の可能性がありうる。郭錫良 1997:133 が後者の立場を取るのには、時間介詞“于”を時点を導くものと見たためであるが、“于”に未来時指向という方向性が認められる以上、拡張する前の段階の“于”にも何らかの動きや方向性があったと考えるのが自然である。そこで本稿では時間介詞“于”は着点マーカの“于”から拡張したと主張したい²⁵⁾。

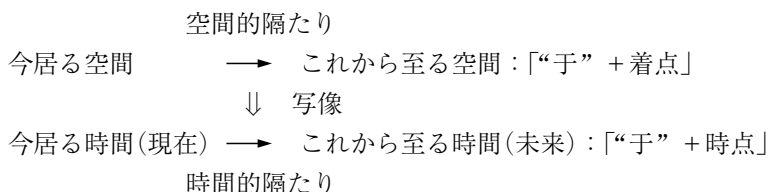
既述したように着点マーカの“于”は移動の結果の到着を表している。移動の主体が自分の今いる地点とこれから到る地点の間を移動することで所属場所に変化が起る。この「変化」のイメージが“于”の未来時指向の成立に重要な影響を与えていると考えられる。“于”の到着のイメージが隠喩を通して時間概念領域に写像されることによって、“于”によって導かれる時間は、発話者が発話時現在に所属していた時間から見て「変化」した時間、これから至る時間、すなわち未来時となったと推測される。

それでは“于”が発話に未来時を導入するのに義務的な介詞でないこと、すなわち時間表現が対貞で用いられている時、“于”が遠い未来の方にのみ用いられ、近い未来の方に用いられないことについてはどう考えるべきであろうか。本稿では以下のような可能性を指摘したい。到着という

行為が、移動主体が出発点から着点の間に横たわる「空間的隔たり」を意識しこれを越える事を意味するものであることに基づくと、“于”に導かれる時間にもこのような「時間的隔たり」があるのではないか。すなわち移動主体と着点の「空間的隔たり」が時間概念領域に写像された際、これがそのまま「時間的隔たり」となり、“于”は話者がこの「時間的隔たり」を認めたと時のみ用いられるようになったと考えられる。それ故に対貞においてはより遠い未来時を導く際に「于」を用いる傾向を生じたものであろう。

以上の拡張については(30)のように表すことができる。

(30)



4. おわりに

本稿では、殷代漢語の時間介詞“于”には未来時指向が認められるという Takashima 1990 の説を再確認し、それに基づいて“于”は着点マーカの“于”から隠喩的写像によって拡張したとの結論を得るに至った。本稿の考察を通じて、“于”の文文化、拡張のプロセスは次の(31)のように表すことができる。

(31) 動詞“于”>着点マーカの“于”→時間介詞“于”(「>」は文文化を、「→」は拡張を示す)

殷代漢語の“于”にはこの他、受容者(recipient)を導く機能もあり²⁶⁾、これも着点を導く“于”から拡張したものと考えられる。着点マーカの“于”は介詞“于”の多様な機能が派生する起点となった可能性があるが、これについては機を改めて考えたい。

<注>

- 1) 本稿が言う「殷代漢語」とは甲骨文と殷代青銅器銘文によって知られる言語を指す。甲骨文の調査には『甲骨文合集』を用い、補足的にその他の著録『小屯南地甲骨』、『殷墟花園莊東地甲骨』の甲骨文も調査した。用例の収集は主に姚孝遂 1989、『小屯南地甲骨』、『殷墟花園莊東地甲骨』の逐次索引、及び「甲骨文全文影像資料庫」(<http://cdnet.lib.ncku.edu.tw/93cdnet/chinese/talk/old.htm>)によった。殷代青銅器銘文の調査には『殷周金文集成』を用いた。
- 2) 本稿の言う「文法化」は動詞から介詞への虚化を、「拡張」は基本義から派生義への意味上の広がりを表す。
- 3) 甲骨文・金文の出典は略称で表記する。詳しくは文末の用例出典を参照のこと。
- 4) 『説文』卷三下・卜部に「貞，卜問也」とあることから、以前は卜辞の命辞（命辞については注8を参照）は疑問文と解されていたが、近年では必ずしも疑問文ではないという説が展開されており、本稿もこれに従い命辞の訳を疑問文としなかった。この問題については高嶋 1989等を参照。
- 5) “𠄎”字には字体が幾通りもあり、Takashima 1990は厳密に隸定して例(1)、(2)をそれぞれ“𠄎”、“𠄎”に作っているが、本稿では煩雑さを避けるため全て“𠄎”字で表記した。また日本語訳は筆者自身が付したものである。
- 6) 「対貞」とは、同一の甲骨内で同一事項について占卜した2条以上の卜辞を指す。

例えば、

己卯卜，敵貞：不其雨。己卯卜，敵貞：雨。（合集 902 正）

〔己卯の日に卜い、敵が貞問した：雨が降らない。己卯の日に卜い、敵が貞問した：雨が降る〕

- 7) この指摘はそもそも陳夢家 1956:227による。
- 8) 「前辞」とは占卜の日時（十干十二支）や貞人（占いの主権者。例えば例文(4)の“余”や(6)の“争”。また以下の例では“王”自身がその役割を担っている）を記した文、「命辞」とは占卜内容を記した文（主に祭祀・戦争・狩猟・天気・作物の実りなどが占卜される）、「占辞」とは命辞に対しての王の判断を記した文、「驗辞」とは占卜した事項が結果どうなったかを記した文である。実際の卜辞を使って説明すると、以下ようになる。

壬辰王卜，貞：田𠄎，往來亡（無）𠄎。王固曰：吉。在十月。茲御。獲鹿六。

前辞

命辞

占辞

驗辞

（合集 37408）

〔壬辰の日に王が卜い、貞問した：田で狩猟する時、行き帰りに災いがない。王が占って言った：吉である。十月に卜った。この占卜を用いた。鹿六頭を捕らえることができた〕

多くの場合、前辞は冒頭から“貞”（一部は“卜”）までであり、“貞”（一部“卜”）

以下は命辞となる。卜辞の大部分はこの前辞と命辞からなる。この他、命辞の後ろに「王固曰」として占辞を記すこともある。さらに一部の卜辞は命辞や占辞の後ろに験辞を記している。但し、前辞・命辞・占辞・験辞が全てそろった卜辞は多くはない。

- 9) 命辞・占辞に時間詞が導入される際、例(2)の「來乙巳」や(6)の「來甲子」、或いは「貞：于翌庚申出」(合集169)の「翌庚申」のように“來”や“翌”を伴うことも多い。“來”や“翌”はともに後続の時間詞が未来時であることを表す語である。これらの語の詳細については Handel 2004 及び沈培 2006 を参照のこと。ちなみに、「來／翌＋時間詞」は時間介詞“于”と共起することも多く(例えば例(1)、(2)、(6)等)、本稿が調査した約400例の時間介詞“于”の例文のうち「于來＋時間詞」は約90例、「于翌＋時間詞」は約70例確認できた。未来時を表す“來”、“翌”と時間介詞“于”の共起例が多いことは、本稿が検証している「時間介詞“于”の未来時指向」を支持する現象の1つとも言える。
- 10) 例(11)、(12)に見える命辞後の「某月」はいずれも占卜を行った時間を表しているのであって、占卜事項の発生時間を表しているのではない。このことは以下の例から確認できる。
- 辛丑卜：于一月辛酉醢黍登。十二月。(合集21221)
- ここで、占卜事項の発生時間は「于一月」であり、従って命辞後の「十二月」は占卜を行った時間としか解釈できない。
- 11) 殷代の青銅器銘文では裸のまま時間詞を用いるか、“在”で時間を導入する。例えば、
- 辛亥，王在虞。(毓祖丁卣・集成10.5396)
- 在六月，佳王廿祀羽又五。(宰觥角・集成14.9105)
- 12) 例えば、
- 庚辰卜：辛至于壬雨。(屯南2772)
- [庚辰の日に卜った：辛の日から壬の日まで雨が降る]
- 13) 現在見える殷墟甲骨文はおよそ紀元前13世紀前半から前11世紀前半までのおおよそ200年の期間にわたる資料であるが、“于”についてはその間、通時的に際だった意味的、機能的変化が見られないため、本稿ではこの200年にわたる資料を1つの共時的資料として扱う。
- 14) 「文法化の一方方向性 (unidirectionality)」とは、語彙的要素が文法的要素になる文法化プロセスにおいて、逆方向への変化は存在しないという説である (Hopper and Traugott 1990:99-139 を参照)。
- 15) 阮元校刻本『十三經注疏』(附校勘記、1965年影印本、臺北：藝文印書館)『毛詩正義』卷一之二・12葉。
- 16) 縮印浙江書局彙刻本『二十二子』(1986年影印本、上海：上海古籍出版社)『呂氏春秋』卷六・646頁。

- 17) 陳奐『詩毛氏傳疏』(1984年影印本、北京:北京市中国書店)卷一・19葉。
 18) ここでわざわざ主要動詞の省略に触れるのは、甲骨文に主要動詞を省略した文がしばしば見られるからである。その際、「勿于」という形で現れることも多い。例えば、

出(侑)于上甲。勿于上甲。(合集 902)

[上甲に対して侑祭を行う。上甲に対して(侑祭を)行わない]

貞:勿于妣庚。貞:于妣庚御。(合集 2671)

[貞問した:妣庚に対して(御祭を)行わない。貞問した:妣庚に対して御祭を行う]

1例目では後文において動詞“出”が、2例目では前文において動詞“御”が省略されている。このように動詞省略文は同一甲骨内に同内容の文があることを前提に書かれるものである。

- 19) “出”を主要動詞とする“于”についてのみ韓耀隆 1973や黄伟嘉 1987:69-70は動作の出発点、起点を導くものと分析している。ところがこの種の解釈については否定する向きも多い。例えば沈培 1991:129は「有人認為上面所舉例句中的“于”字有的是表示行為動作的出處、來源，這是不正確。從卜辭“于”字的使用情況來看，它還不像後代的“于”字那樣，可以表示“從……”、“自……”的意思」と言い、张玉金 2003:197は「韩文认为卜辞中的“于”有“从”的意思，这也不可信」と述べている。さらに巫称喜 1997:30-31は「“于”应释为“到”，“往出于敦”意为“外出到敦”，表示“出”的终点」と論じている。本稿では、以下の2点から“于”が起点を表さないと考えるに与したい。第1点は共起する動詞の問題である。韓耀隆 1973や黄伟嘉 1987:69-70は“出”の場合に限り“于”が起点を表すと説いているが、この他の移動動詞、例えば“來”などの場合にはこれを認めていない。なぜ“于”が“出”と共起した場合のみ起点を表し、他の動詞と共起したときは着点を表すのか、説得力のある議論を展開しているものは皆無である。第2点は起点を表す他の介詞の存在である。起点を表すのに春秋時代以降の文献では確かに“于”を用いることが多いが、甲骨文ではほかの介詞“自”と“从”が専ら用いられる。例えば、

庚子卜，貞：乎(呼)侯壽出自方。(合集 8656)

[庚子の日に卜い、貞問した:侯壽を呼んで方国から出させる]

翌日壬，王其省田从宮。(合集 29156)

[壬の日に王は宮地から狩獵地を巡察しに行く]

以上から、“出”と共起した“于”のみを起点を表す介詞と分析するのは首肯できない。

- 20) ここで「直接に場所目的語を導きにくい」と述べたのは、例えば“往”や“入”が“于”なしで場所目的語を導く例が見られるからである。

勿往徹京。五月。(合集 8072)

〔徹京地に行かない。五月に占った〕

王往宮，不雨。(合集 33161)

〔王が宮に行けば、雨は降らない〕

辛卯卜，猷貞：今夕王入商。(合集 39990)

〔辛卯の日に卜い、猷が貞問した：今夜、王は商に入る〕

但し、“往”や“入”が“于”をとらない例は全体から見れば少数である。また「入商」の如きはすでに慣用化されているようで、このフレーズだけは『合集』中、20例程見られるのだが、このほかの「入NP」はほとんど見られない。また“歩”が“于”なしに場所目的語を導く例は、『合集』中1例も発見できなかった。よって本稿ではこの種の文を例外として処理する。

21) 例えば、

其逐杳斲自西、東、北，亡戕。(合集 28789)

〔西、東、北から杳地の斲を追えば、災いはない〕

其自西來雨。其自東來雨。其自北來雨。其自南來雨。(合集 12870)

〔雨が西から来る。雨が東から来る。雨が北から来る。雨が南から来る〕

甲辰，貞：歲于小乙。(合集 32617)

〔甲辰の日に貞問した：小乙に対し歳祭を行う〕

于小乙求。于祖丁求。于父己求。于父甲求。(合集 27348)

〔小乙に対して求める。祖丁に対して求める。父己に対して求める。父甲に対し求める〕

1例目、2例目は起点を導く介詞“自”の例。前者では動詞の後で、後者では動詞の前で用いられている。3例目、4例目は受容者（祭祀対象）を導く介詞“于”の例。前者では動詞の後で、後者では動詞の前で用いられている。但し、時間介詞のみ動詞の前が常態であることから、前置による焦点化の議論には当て嵌まらない。

22) 実際には沈培 1991:131 は、本稿が言うところの「着点を導く“于”」を「含有“到……”意思的“于”字結構」と呼び、その上で「含有“到……”意思的“于”字結構従不前置」と述べている。ちなみに沈培は着点を導く“于”に前置現象がないことを認めつつも、これを介詞と分析している。

23) ここで言う「移動を表す自動詞」とは例(21)から(25)で挙げた、“往”、“歩”、“出”、“入”、“來”などを指す。

24) 空間表現に属し、且つ連動構造の第二動詞の位置で文法化したものには、例えば“著”が挙げられる。徐丹 1992:453 及び徐丹 2004:54-56 によると、“著”はそもそも「附着」という意味の動詞であったが（例えば『漢書』食貨志上「今歐民而歸之農，皆著於本」。「今、民を殴って農業に帰らせ、皆を本業につかせる」の意味）、5世紀位から主要動詞の後ろで地点を導く用例が見られるようになるという。その際、主要動詞には専ら「覆盖」、「系扎」、「位于」の意味を持つ動詞が用いられ、一方で“著”

は主要動詞の行為によって対象が付着・存在する地点を表していた。以下は徐丹 1992:453 が引く例である（日本語訳は筆者による）。

長文尚小，載著車中。（『世説新語』德行）

〔長文はまだ幼いので、載せて車中に置いた〕

雖長大，猶抱著膝上。（『世説新語』方正）

〔大人なのに、まだ抱いて膝の上に置いている〕

下って現代閩語では“著”が方位介詞として用いられているとの報告が梅祖麟 1988:196 によってなされており、これによって徐丹 1992:455-456、徐丹 2004:54-56 は閩語の地点を導く介詞“著”は動詞の“著”が虚化したものと見なしている。以下は梅祖麟 1988:196 の引く閩語の例である（日本語訳は筆者による）。

坐著椅子頂。

〔椅子に座る〕

このほか、張焯 2002:80-85 は動詞“著”にいくつかの意味を認めつつ、その中でも「放置」の意味を持つ“著”が連動構造の第二動詞の位置で虚化し、場所を導く介詞になったと考えている。以上、徐丹と張焯の両者は文法化前の動詞“著”の解釈に若干の隔たりがあるものの、“著”が「VP + “著”動 + NP」という連動構造において文法化し、地点を導く介詞となったという点については相違ない。この文法化プロセスは、“于”が「VP + “于”動 + NP」という連動構造において移動の結果の着点を導く着点マーカーとなったというプロセスと平行する。

25) この拡張は隠喩 (metaphor) を通じて空間概念領域の“于”が時間概念領域に写像 (mapping) されることによるものだと考えられる。周知の通り、空間を時間に見立てることによる意味の拡張は普遍的な現象で枚挙にいとまがない。

26) 以下が受容者として祭祀対象を導く例である。

辛未貞：其奉禾于高且（祖）。（合集 32028）

〔辛未の日に貞問した：作物の成育のため高祖に対し奉祭を行う〕

甲辰，貞：歲于小乙。（合集 32617）

〔甲辰の日に貞問した：小乙に対し歳祭を行う〕

<参考文献>

高嶋謙一 1989. 「殷代貞卜言語の本質」, 『東洋文化研究所紀要』第 110 冊：1-166 頁, 東京：東京大学東洋文化研究所。

陳夢家 1956. 『殷虛卜辭綜述』。北京：中華書局。

郭錫良 1997. 「介詞“于”的起源和发展」, 『中国語文』1997 年第 2 期：131-138 頁。

韓耀隆 1973. 「甲骨卜辭中“于”字用法探究」, 『中國文字』第 49 冊（頁番号なし）。

黃偉嘉 1987. 「甲骨文中在、于、自、从四字介詞用法的发展变化及其相互关系」, 『陝西

- 师大学报』1987年第3期：66-75页。
- 梅祖麟 1988. 「汉语方言里虚词“著”字三种用法的来源」, 『中国语言学报』第3期：193-216页。北京：商务印书馆。
- 梅祖麟 2004. 「介词“于”在甲骨文和汉藏语里的起源」, 『中国语文』2004年第4期：323-332页。
- 沈培 1991. 『殷墟甲骨卜辞语序研究』。臺北：文津出版社。
- 沈培 2006. 「关于殷墟甲骨文“今”的特殊用法」, 『古文字研究』第26辑：63-69页。北京：中华书局。
- 巫称喜 1997. 「甲骨文“出”字的用法」, 『古汉语研究』1997年第1期：29-31页。
- 徐丹 1992. 「汉语里的“在”与“着(著)”」, 『中国语文』1992年第6期：453-461页。
- 徐丹著·张祖建译 2004. 『汉语语法引论』。北京：北京语言大学出版社（原书：Xu, Dan. 1996 *Initiation à la syntaxe chinoise*. Paris: Langues & Mondes—L'Asiathèque）。
- 姚孝遂 1989. 『殷墟甲骨刻辞类纂』。北京：中华书局。
- 张赫 2002. 『汉语介词词组词序的历史演变』。北京：北京语言文化大学出版社。
- 张玉金 1994. 『甲骨文虚词词典』。北京：中华书局。
- 张玉金 2003. 『20世纪甲骨语言学』。上海：学林出版社。
- Handel, Zev. 2004. The Use of jin 今, yi 翌, and lai 來 as Time Demonstratives with ganzhi Dates in the Oracle-Bone Inscription. *Meaning and Form: Essays in Pre-Modern Chinese Grammar* (『意義與形式——古代漢語語法論文集』): 57-75. München: Lincom Europa.
- Hopper, Paul J and Traugott, Elizabeth Closs 1990. *Grammaticalization (Second Edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ito, Michiharu and Takashima, Ken-ichi 1996. *Study in Early Chinese Civilization (vol1+vol2)*. Osaka: Kansai Gaidai University Publication.
- Pulleyblank, E, G. 1986. The Locative Particles yü 于, yü 於, and hu 乎. *Journal of the American Oriental Society* Vol.106: 1-12.
- Serruys, Paul, L-M. 1981 Towards a Grammar of the Language of the Shang Bone Inscriptions. 『中央研究院國際漢學會議論集』語言文字組：313-364.
- Takashima, Ken-ichi 1990. A Study of Copulas in Shang Chinese. *The Memories of the Institute of Oriental Culture* No.112: 1-135.

<用例出典>

甲骨文

「丙編」：張秉權『殷虛文字丙編』。臺北：中央研究院歷史語言研究所。1957-1972。

「人文」：貝塚茂樹『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字·本文編』。京都：京都大學人文科學研究所。1960。

「合集」：郭沫若·胡厚宣『甲骨文合集』。北京：中華書局。1978-1982。

「屯南」：中國社會科學院考古研究所『小屯南地甲骨』。北京：中華書局。1980-1983。

「花東」：中國社會科學院考古研究所『殷墟花園莊東地甲骨』。昆明：雲南人民出版社。2003。

金文

「集成」：中國社會科學院考古研究所『殷周金文集成』。上海：中華書局。1984-1990。

殷代汉语时间介词“于”的语法化过程之考察 —通过未来时指向探讨—

户内俊介

(东京大学·院)

提要 在理解为表示时点的前提下，殷代汉语的时间介词“于”过去一般被认为是由引导行为动作发生的地点的介词“于”扩展而成的。然而，Takashima 1990 指出甲骨文里的“于”引导时间时带有明确的“futurity”（本文将其称为“未来时指向”）。如果这个主张是正确的，就必须重新研讨过去的论述。本文证实 Takashima 1990 的分析是妥当的，并且提出一个新的解释：“于”首先通过语法化从移动动词变成目标标记，然后扩展成时间介词，其指向未来时的语义和功能即由此而来。

关键词 甲骨文 时间介词 于 语法化 未来时指向